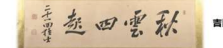
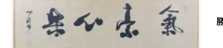
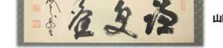
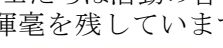
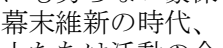
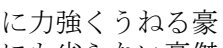
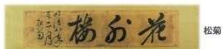


AIでは到達できない 書の歴史と神髄

中野 広行会員

歴代総理の揮毫です。国酒として日本のお酒を普及させるための一環で、日本酒造組合へ贈呈している書です。直近6代の総理のものですが、国を代表する総理の書としては、残念なものも見受けられます。こちらは初代伊藤博文、二代目黒田清隆、三代目山県有朋の書です。内閣閣議書の大臣署名は、明治期最初に筆で行われて以来、今現在も筆によることが慣例になっています。次は、松菊・甲東・南洲という雅号の書。松菊は木戸孝允、甲東は大久保利通、南洲は西郷隆盛です。明治維新三傑、受ける印象として、木戸孝允は少し神経質、西郷隆盛はイメージ通り豪傑、意外なのは冷徹と言われた大久保利通です。西郷以上に力強くうねる豪快な書です。内に秘める思いは西郷にも劣らない豪傑さがあつたのではないのでしょうか。幕末維新の時代、あれだけの激動期でありながら、志士たちは活動の合間に書をたしなみ、多くの作品と揮毫を残しています。山岡鉄舟、勝海舟、吉田松陰の書です。江戸城無血開城に最も貢献したのは山岡鉄舟と言われていますが、肝の据わった書です。勝海舟は、雅号の海舟の方の名前で有名です。吉田松陰は頑固な印象を受ける書です。



この書につながる漢字の歴史を辿りたいと思います。最初に神の言葉であった甲骨文、次に為政者の言葉であった青銅器等に掘る金文、そして竹簡、その後紙の普及と共に一般にも広まった文字は書体も整えられていきます。中国殷王朝で発祥した文字は、秦の始皇帝により初の統一書体「小篆」となり、清の康熙帝が字書の集大成として康熙字典を成立させ、それが繁体字となり、現代においては簡略化された簡体字となつて、ほとんど記号のような文字になります。日本へは、4世紀末頃に伝来し、そこから万葉仮名、草仮名、片仮名ひらがなが生まれていきます。中国が簡体字、韓国がハングルとなったため、康熙字典の漢字は日本に残り、世界でも稀な表語文字と表音文字の組み合わせとなりました。

中国の書家は、書聖として称えられる東晋の王羲之が書を芸術の域に高めました。初唐の三大家として欧陽詢、虞世南、褚遂良、第二の書聖として唐の顔真卿、宋の三大家として蘇軾、黄庭堅、米芾が挙げられます。まず王羲之。書の最高傑作として名高い「蘭亭序」。宴で酔って書いたもので、後日何度も清書を試みますが最初に書いたもの以上の出来にはならなかったとのこと。



初唐の三大家、欧陽詢、虞世南は究極の模範的な楷書として知られ、褚遂良には少ししなやかさが加わります。王羲之に並ぶ二大宗師と言われるのが顔真卿です。激情の書として有名な「祭姪文稿」。安史の乱で親族が亡くなったことに悲憤慷慨して書いたもので、だんだんと感情が高ぶり、後半に行くほどそれが文字に乗り移っていきます。宋の時代の蘇軾、黄庭堅、米芾になると、整然とした書体からかなり自由度の高い書体になっていきます。

日本の書家は、三筆として、空海、嵯峨天皇、橘逸勢、三蹟として、小野道風、藤原佐理、藤原行成が挙げられます。金石分以外の日本最古の書といわれるのは、「法華義疏」で聖徳太子の真筆として伝わりますが定かではありません。王羲之の「楽毅論」を臨書した光明皇后。整った王羲之より、かなり気の強い印象を受ける書です。三筆ではまず空海。唐で王羲之等の書を学び、日本の書の代表的存在です。「風信帖」が有名です。続いて嵯峨天皇。天皇の書を宸翰と言います。そして橘逸勢です。彼も唐で書を学んでいますが、不遇で残された書も多くはありません。三蹟は、これら唐様の三筆から、書風が柔らかくなり和様へと変わっていきます。小野道風、野からとって野跡と言います。続いて藤原佐理。佐からとって佐跡。こちらは、乱雑とも見える文字の通り、生き方もかなり乱雑でした。藤原行成。権大納言の官位から権跡と言われます。その後の世尊寺流の祖となりました。日本独自なものが仮名の書となります。『古今和歌集』の現存する最古の写本「高野切」。紀貫之の書と言われていましたが、そうではなく複数の方が書いたもののようなのです。仮名のお手本として必ず使われ、シンプルな分、漢字より仮名の方が大変難しく、かなりの修養が必要です。

我が家は、呼吸する筆法「円空の書法」という独自の流派に属しています。創始者は、始祖鎌足公北家六十四世の受川宗央という方です。息子が6歳の時、シンケンジャーという剣術ものの戦隊番組がありその中で書も出てきますが、それを見て書道をやりたいと言い、親子で教室に入りました。その講師が受川先生でした。息子は中学時代、薩摩の精神を研究しその神髄を書にしました。薩摩の精神の基は薩摩いろは歌にあります。そこからスタートし、1年目は島津斉彬筆の論語からとった「思無邪」に感銘を受けこれを書にします。2年目は、最後は袂を分かった大久保利通と西郷隆盛の2人の書を1つにしました。3年目は西郷隆盛の神髄が最も表れている五言律詩を全紙に揮毫。高校では野球をやりながら書を書き続け、全国コンクールで奈良新聞社賞も受賞しました。現在は早稲田大学書道パフォーマンスサークルで活動。三陸復興イベント、今年のサミット時に開催されたユースサミット、神田の保育園等にも招かれてパフォーマンスを行っています。私は息子と一緒に始め、談山神社の大賞をとってようやく書のスタートにつけた感じです。妻は元々やっていて文部科学大臣賞も受賞し、家で書道教室を行っています。



書道と習字はイコールではありません。習字は正しく整った字を学ぶ。書道は字を通した自己表現。さらに円空の筆法は生命そのものとなります。書に魂は宿ります。これはAIが到達できないものです。日本が誇る書をたしなむ方が少しでも増えてくれることを願って卓話を終わります。